

Title	スサノヲノ命及び出雲の神々
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1931
Jtitle	史学 Vol.10, No.1 (1931. 3) ,p.47- 79
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19310300-0047

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

スサノヲノ命及び出雲の神々

日本の神話の中最も神として複雑な性質を持つてをるのはスサノヲノ命であらう。Dr. Buckley や W. G. Aston 高木敏雄氏等は、つとにこの神に暴風雨の化身を認めてゐる。なるほど多くの文献が、こゝういふ解釋を妥當ならしめてをる。彼は「八拳須むなさに至るまで啼いさちき。その泣きたまふさまは青山を枯山なす泣枯し、河海は、悉く泣乾しき」といふ形容をされ、また天に上らんとするとき「山川悉く動み、國土皆震さ」といはれてをる。天に於て彼は田の畔を離ち、溝を埋め、天照大御神の忌服屋にゐまして神御衣を織らしむる時、そのはたやの頂を穿ちて、天の斑馬を逆剥ぎにして墮し入れる。大御神はあごろきて天石屋戸にかくれ、天地晦冥となつたのである。命の犯したこゝういふ全ての惡事は、雷雨とか嵐の所爲に歸することが出来る。

なほ紀の異傳によると、命が天より追はれた時ながあめ降り、命青草を結束して以て笠蓑となし、宿を衆神に乞ひ、衆神之を拒みし故、雨風甚しといへども、留り休むことを得ず、辛苦して降るとある。命は地上に降り、大蛇に吞まれんとせる小女を救ひ、その蛇の尾に天叢雲劔を發見する。叢雲といふ

名が嵐とか雷雨に關係することは云ふまでもない。

またスサノヲノ命は、田心^{たしん}姫一名田霧姫といふ女、湍津姫といふ女を有してをる。たごりはたぎると同義であらう。タキリ姫は大國主命と婚して、阿遲鉏高日子根神を生む。記はこの神を賀茂の神なりとしてをる。自分は、この神を雷神だと考へてをる。此神の子に、多伎都比古あり、之に旱の時雨を求めるのである。(田雲風土記楯縫郡の條參照)

こういふ材料から、スサノヲノ命の嵐に緣故のあることは充分證明せられる。然し命の性質は、なほ複雑で、これを儀式と聯絡させて研究してゆくことが必要である。命が、惡事を重ねた時、八百萬神は、共にはかり、千位置戸を負せ、また鬚を切り、手足の爪を抜かしめ、神やらひにやらふとある。この挿話は、古代の祓の儀式と關係してをる。上代人は、六月及び十二月の晦に宮城朱雀門で大祓の式を行ひ、天皇中宮東宮を始め、百官男女以下天下萬民の半年の間に犯した罪穢を解除せんとしたのである。各自は、祓物を出す。そして祝詞を讀み、菅で身體を撫で罪穢をそれに移して清めるのである。その時の祝詞の中には天津罪と國津罪とを列擧し、天津罪の中に須佐之男命が天で犯した全ての罪を數へてある。その上この贖ひ物として用ひられ、式後河に投ぜられしものの中に人像がある。また式に際し河畔に白き馬を牽き立てる。これは、馬が耳敏きゆえ、神が敏く速かに聞き給ふことによすがとしてつれくるものであると説かれてあるが、本來人像も白馬も遠い時代の生贄の痕跡ではあるまいか。

祝詞の終末に、速川の瀬に坐る瀬織津比咩に祈誓して全ての罪を、大海原に持ち出でむことを、また八百道の八鹽道の鹽の八百會に坐す速開都比咩が、これらの罪を可可吞まむことを、ついで氣吹戸に坐す氣吹戸主といふ神が、その罪を根の國底の國に氣吹き放たむことを、次に根の國底の國に坐す速佐須良比咩が、これをさすらひ失はむことを乞ふ。

かやうにこの祝詞に従ふと、速瀬の神、海の神、氣吹き神、冥界の神が、何れも穢を、祓ふことを委託されてをる。しかして須佐之男命は、この何れの神とも縁故を持つてをる。彼は、湍津姫、田心姫（田霧姫）を娘として持ち、父神には、蒼海原をしらさんことを命ぜられ、また父神の鼻から生誕し、従つて氣吹き神である。その女須勢理姫は、父と共に根の國にあり、大國主命と結婚してをる。篤胤などの云ふ様に此姫が根の國底の國にをり、穢を、消滅せしめてをる速佐須良姫と同一人ではなからうか。これらの事實からあしてスサノヲノ命神話の一部成立に祓ひの儀式が重要な役割を演じてをると云ふことが出來やう。

スサノヲノ命は、最初から父神に神やらひにやはられた神である。高天原からも放逐される。彼は、或季節に人界から全てのまがつみを身に引き受けて追はるべき、身代りの山羊の體現と考へられる。その姉の神が笑ふ神である反對に、弟なる彼は、泣きいさつる神である。追はるべきもの、犠牲となるものがつねに涙をもつて送られることは想像せられる。

しかしスサノヲノ命を、たゞ一圖に惡神である、追はれる神であるとのみ解するのは宜しくない。古代日本人にとつて神は善惡二様の力を及ぼすと考へられてゐた。スサノヲノ命の行爲の原因を細密に研究すると、此神は、本質的にはむしろ善人であつたと云へる。その啼きいさちたのも、妣の國を戀ひ、慕つたのであるし、その天で惡むべき所行を犯したのも、姉君に對する誓約に勝つて勝ちさびたに外ならずと解釋せられてをり、その性質は、ごく素朴で惡氣がない。後の神話を見ても、稻田姫に對する場合の如く弱者に對する同情もあり、樹木繁殖の物語におけるごとく子孫の將來に對する配慮も見うけられる。

天において彼は、その姉に對し夫の役割をつとめ、産むべき子の物實として之にその劍をおくつてをる。その代り彼は、姉から玉を受取る。かくして二人は、多くの子を生み、その中に、天孫の祖たる忍穗耳命も出雲の國造の祖たる天菩卑能命の名も見出だす。

地上に下りてから、彼はその鬚髯を抜き散して、杉をつくり、胸毛を抜散して檜をつくり、尻の毛を抜となし、眉の毛を櫟樟となす。またくらふべき八十木種を皆播き生へ、最初の青山を枯山となした逸話とは正反對に振舞ふのである。先に田の阿を離ち、溝を埋めた暴行と反對に大蛇を殺して奇稻田媛を助ける。新嘗屋をけがし、神御衣を織る服屋の頂をうがつて不淨を投げ入れた彼は、今度は、瑞宮をつくる材とすべき檜を植え、またその子は大屋津姫であり、その次は抓津姫であり、その五世の孫は、天

葺根神である。命の殺した大宜津比賣神から蠶と稻種と粟と小豆と麥と大豆とが生ずるし、また命が大
山祇神の女を娶つて生んだ子は、大年神次は宇迦之御魂神である。大年神が香用比賣と婚して生んだ子
が御年神である。

かやうに先には田畑を荒し山を泣枯した神が、今度は、生産する神となつてをることに注意しなければ
ばならぬ、嵐、雷雨の神は、一面に於て破壊者であるけれども、同時に水の神であり、田に必要な神とし
て農事に際し祭られてゐたのであらう。日本の民間信仰において電は、稻妻といはれ、稻光といはれ、
稻つるびといはれ、關東では雷の落ちた田には青竹をたて注連を張つてあがめる。雷雨又は嵐の神は、
一轉して田をみのらせる神、農神として考へられ易かつたのである。スサノヲノ命の大蛇退治の話にも
農業關係儀式の痕跡が窺はれる。

蛇は、スサノヲノ命に全く無關係ではない。その子孫の間には、蛇體の神がをる。民間傳承に従ふと
雷雨の神は、蛇體に考へられてゐたのである。その上大蛇の居所の上に叢雲があつたといふ紀の記事か
らみても、スサノヲと大蛇とが、本來同一の神で、この話の中にそれが折半してをるのではないかとさ
へ疑はれる。まづ大蛇に吞まれんとした稻田媛のイナタが農事に關する事を注意しなければならぬ。媛
が、蛇の神にさゞげられんとする話の中に犠牲の記憶が存する。一體日本の民間傳承を通じて田植の日
に若き女の死を説くこと、しかもその死が水の神の影響に歸せられてをる例が多い。

常陸古風土記逸文にある次の物語、昔、兄と妹と同日に田をつくりて今日おそくうゑたらんものは、伊福部神のわざはひをかぶるべしと云ふ。すると妹が田をおそくうゑたので、いかづちが妹を蹴殺した。兄そのかたきをうたんとし雌雉の助けをかり、伊福部岳にいたり、いかづちの伏せる岩屋にいたり、之をさらんとするに雷助命を請ひ、以後その子孫に雷震のおそれなからんと約すといふ話に見ゆる田植の日遅く植えた若き女が雷のために殺される筋は注目しなければならぬ。

柳田國男先生は、昔の日本人は普通朝夕二度しか食事しなかつたのに田植の時に限つて特に結構な晝の食事を調理し、ある特定の女を美しく化粧させて、之を植田まで持參させ、一同賑々しく食つたこと、その食事の餘りは家に持ち歸ることを嚴禁され、必ず田の中に棄てたこと、また傳説は屢々この晝飯時の役目の若い女が田植の日に死んだことを語り傳へ、一方田植の日の一習慣として早乙女等に泥を掛け、甚しきは一度は水田の中に轉がし倒す迄は止めなかつた習俗の存在に注目され、古代における水の神に若き女が奉獻コンサクレされた農業的儀式的痕跡を推測されてをる(柳田國男氏、郷土誌論一四一—一四四頁)。

播摩の風土記に従ふと、稻をはやすため獸の血を使用した習慣があつたらしい。そういふ行事を行つた神の名は大水神と呼ばれてをる。(丹津日子神法太の川底を雲潤の方に越さしめむと欲し云ふ時に、彼村にます大水神吾は、宍の皿を以て田つくる故河水を欲せずと答ふ云々「賀毛郡の條」)。

その上祝詞によると祈年祭トシゴヒノマツリ(豊年を祈誓する春祭)において御年神(須佐之男命の孫)に白馬、白猪、白

雞を獻つてをる。この中猪は、雷の神と關係あることに注意しなければならぬ。山城風土記によると卯月の吉日に行はれる賀茂の祭の日、馬には鈴を懸け、人は猪の頭を蒙ぶり駈馳て以て祭祀をなす、これをなすことにより五穀成り天の下豊かなりといふ。猪は、あばれまはる動物であり、かつ毛の多いといふ性質を持つてをる。毛は、上例の神話にも見るやうに植物に聯想させられてをる。また倭建命の傳説においても伊服岐能山の神は、白猪に化して現れ、大氷雨を降らしめ、命をうちまごはしめてをる。祈年の祭に猪が用ひられるのは、この動物の本來雷の神水みくまりの神と縁あるゆえではなからうか。もともと此祭には井の神、山口に坐する神、水分みくまりに坐す神などを祭り、水の信仰と關係の深いことを注意しなければならぬ。その他此時捧ぐる白雞は、やはり白鵠みくまりなどと同様水の神に縁故の多い動物なるべく、また白馬も祓ひの儀式の際に牽かれること上述のとほりである。

農業の儀式に若き女亦は動物を特に淨め、神の領するものとした習慣が存し、スサノヲノ命が蛇にさげられし若き女を救ふといふ傳説が生じてきたのであらう。そのためにスサノヲノ命は或時は女神または馬の殺戮者として、或時は、反對に女神の救出者としてまたは樹木、穀物の生長を助長する神として表されてをるのであらう。

兎に角此神が農業の儀式と關係深かつたこと、田を生育せしむべき水の神と縁故のあつたことが想像せられる。古代人の信仰によれば此神は農業生活に或程度まで必要であつたのである。たゞ、或時期を

越え、或ひは必要以上に威力を發揮せしめられると脅威を與ふる神であつたのである。冬には少くとも此神の存在は人間にとつて迷惑であつたのである。これを送り、此世界より除去することが人民にとつて必要であつたのであらう。天上に於て形式的にも女神と夫婦關係にあつたものが一轉して神やらひにやられるといふ神話の筋は、こゝにいふ考へ方から生れたのではなからうか。アマテラス・スサノヲ兩神の神話は、やがてまたイザナギ・イザナミ兩神の關係と相對應してをる。後者に於て美はしき女神が一轉して恐しき死の女神となり、その親密なる夫婦關係が激烈なる仇敵關係にかはつてゆく階程が如何にもよく「自然に於ける神の手助けが或時期において極めて必要であり、その時期を越ゆる時は不必要化し、むしろこれを追放することの必要である」といふ古代人の考へをあらはしてをる。

要するに天照大御神にしろスサノヲノ命にしろその複雑なる性質は、季節祭に於ける儀式と一つ一つ關係づけてゆくことによつてその部分部分を闡明してゆくことが出来る。

スサノヲノ命が複雑な性質を持つてをることは以上の通りであるが、此神と出雲の神々との間に血縁が結ばれてをることに注意しなければならぬ。この神は、追はれる神であり、敗北せる神である。津田博士などの云はれるやうにかやうに姉君に敗れた弟神を宗教的大勢力であつたらしい出雲の神の祖とする所に大和朝廷關係の神話潤色者の意圖が窺はれる。然しスサノヲノ命の性質そのものに出雲の神の性

質と近い所があり、この結合がなりたつたのであらう。

それではスサノヲノ命の子孫達はごういふ性質を持つてをるか云ふに、その孫布波能母遲久奴須奴神は、淤迦美神の女日河比賣と結婚して深淵之水夜禮花神を生む。此神は、天之都度閑知泥神を娶つて淤美豆奴神を生む。ごういふ神名が水・河・淵と關係あり、また淤迦美が蛇神であつたことは論ずるまでもない。

スサノヲノ命の中最も傑出してをるのは大國主命である。此神も蛇に關聯してをる。即ち此神の幸魂奇魂である大物主神は、紀の崇神天皇十年の條に蛇身を現じてをる。三諸岳の神は、一説に大物主神とされてをるが、雄略帝の七年には天皇のために小子部連螺贏三諸岳の神大蛇を捉へて來り、「其雷虺虺、目精赫赫」天皇畏怖して之を岳に歸さしめ、螺贏の名を改めて雷としたとある。即ち此神は蛇身にして雷神と考へられてをつたのである。

出雲の神とは關係ないが常陸風土記那賀郡の次の記事からも雷と蛇との關係を裏書することが出来る。

古老曰く兄妹二人あり、兄を努賀毗古と名づけ、妹を努賀毗咩と名づく。時に妹室に在り、人あり姓名をしらず、常に就て婚を求む。夜來り晝去る。遂に夫婦と成る。一夕懷妊す。産むべき月に至つて終に小蛇を生む。明くれば言なきが若し。くるれば母と語る。是に於て母も伯も驚きあやしみ、神の子ならんとおもひ、淨杯に盛つて壇を設けて安置すれば一夜のほごに已に杯中に滿つ。瓮を易へて之を置く。亦瓮の内に滿つ。此くの如き三四、敢て器を用ひず、母子に告げて曰く、汝が器宇を量るに自ら神の子たる

ことを知る。我屬の勢ひたすべからず。宜く父のいますところに従ふべし。此に有るべからず。時に子哀泣し、面を拭ふて答へて一小子を副え付せんことを答ふ。母これをこそはるこ子恨みを含み、ものいはず、訣別の時に臨て怒怨にたへず、伯父を震殺し、而して天に昇らんを欲す。時に母驚動し、瓮を取つて之を投ぐ。神の子に觸れて昇ることを得ず。因て此峰(肺時臥之山)に留る云々さいふ。

雷神の子がその血縁のものと争ひ、天に昇るといふ筋は、雷神の粗暴性を明かに示してをる。

大國主神は、事代主神の父である。彼は、後に葦原中國を天孫に奉りし時船の柁を踏み、海の中の蒼柴籬の中に隠れ去つた。記には、此神が、三島の溝織姫の許に通ふため八尋の熊罴に化したことを述べてをる。熊罴は、神怪な海の動物であり、龍蛇と混同されてゐたのである。今一人の子建御名方神は、洲羽に逃れて、建御雷神に服従する。此神をいつく諏訪神社が後に蛇體に觀ぜられてゐたことをも注意しなければならぬ。

今一人大國主神の子で研究に價するのは阿遲志貴高日子根神である。神話は、此神が雷神であると、あからさまに云はぬ。然し、記に「今迦毛大御神と謂ふは此神なり」と註してをる。一體山城賀茂社では後世雷神が齊かれてをるのである。山城風土記逸文によると、

「賀茂と稱すは、日向の曾の高千穂の峯に天降り坐しし神、賀茂建角身命なり、神倭磐余比古天皇の御前に立ち上りまして、大倭の葛木山の峯にさゞまり坐し、そこよりやうくに遷りて、山代の國岡田の賀茂に至りまし、山代河に隨ひ下り坐し、葛野河と賀茂河と會ふ所に至り坐して、迺かに賀茂河を見て詔り給はく、狭く小^ほそかれども、然し石河の清川なりと詔り給ひてやがて名づけて石河の瀬見の小川さいふ。その川より上り坐して、久我の國の北の山基に鎮まり坐しき。その時より名づけて加茂と曰へり。賀

茂建角身命、丹波の國の神野の神、伊賀古夜日賣に娶ひて、生ませる子、名を玉依日子と申し、次を玉依日賣と申すとある。

この玉依田賣が處女懷胎をして賀茂別雷神を生むのである。

本居宣長が古事記傳の中に注意してをるやうに姓氏錄賀茂朝臣の祖大國主神の後大田々禰古ノ命の孫大賀茂都美ノ命と風土記の建角見ノ命と類似點が非常に多い。前者は阿遲須枳高日子根命の社をまつる祝の家であるが、同じくその祖に活玉依毘賣あり、また丹塗の矢のことも伊須氣余理比賣の祖の條に見ゆる。こゝにいふ傳承の混同から見ても葛城の賀茂に齊く阿遲須枳高日子根命の山城なる賀茂別雷とほゞ性質の近い神であつたことが裏書される。

出雲風土記神門郡高岸郷の條によると阿遲須枳高日子命は、いたく晝夜哭きましたる故、其處に高さ屋を造りまさせ、高^{はし}椅を建て、登り降り養^{ひた}し奉つたといふ。椅^{はし}は、上代日本人の考へによると天に達する道路である。丹後風土記逸文にイザナギノ命天に通ふために梯を作り立て給ひ、これが神の御寢坐せる間に仆れ伏したといふ傳説をあげてをる。高梯を登り降りして兒を養つたといふ挿話は天を上下する雷神の生立譚としてふさはしい。出雲風土記仁多郡三津郷の條には阿遲須枳高日子命御須髮八握生ふるまで晝夜哭き坐し辭通はず、その時^{おみおや}祖命、御子を船に乗せて八十島をゐてめぐりつゝうらかし給へどもなほ哭きますことやまずとある。後に見るやうに船も雷神が天に往復する時の乗物である。

今一つの事實は、此神が、天若日子の死を弔ひに來て、死者と間違はれた時、大いに怒り、十拳劔を

抜き、喪屋を切り伏せ、天に飛び去る。その時妹高比賣(下照姫)が「天なるや乙棚織女のうながせる、玉の御統すまるの穴玉はや、み谷ふたわたらす、味鉏高彦根の神ぞや」と歌つたといふことである。此逸話が、雷神らしい光明的なかつ激情的な性質を表はしてをる。

阿遲鉏高日子根神について語られる神話の挿話が、本牟智和氣御子の物語にも見ゆることは注意すべきである。ホムチは火の神といふ意義である。彼がかく名づけられたのは、その火の中に生誕せるがためである。その母は、垂仁帝の妃であり、兄沙本昆古が帝に叛せるとき、その稻城の中に入つて焼死する(身内争ひの型テーム)。ホムチワケは、八拳鬚心前ムナサキに至るまで御言を發せぬ(「真言云はぬ子」の型テーム)。これを船の中にいれ和める(「雷船」の型テーム)。彼が初めて眞の言葉を發したのは、出雲の大國主命を齊ままつた時である。御子が一夜婚した肥長比賣は、蛇であり、御子が、畏み、逃げた跡を海原光てらして追ひかくる(記八九—九二頁、舊國史大系本、以下皆これにならぶ)。

此「追跡」の型テームは、播磨風土記飭磨郡伊和里の條の大汝命の傳説の中にも見出だされる。その子火明命を棄てんとして父神舟で逃ぐると子神風波を起して追ひ迫り、その船を打破るといふ筋である。

釋日本紀に引かれた尾張風土記逸文に品津別皇子に關する他の傳へを載せてをる。それによると皇子七歳になるまで語とひしたまはず、その時皇后の夢に神告げて曰く「吾は多具國神、名は阿麻乃禰加都比女といふ。吾未だ祝はふりを得ず。若し吾がみ爲めに祝人を充てば皇子能くもの言ひ、亦み壽ながからむ」

と云ふ。帝卜によつて日置部等が祖建岡君を選び、神を覓がしむる。建岡の君美濃國花鹿の山に到り、賢樹の枝を折りて縵を造り、吾が縵の落ちむ處に、必ずこの神まさむと云ふ。縵去りて吾縵郷に落ち、乃神ますことを識りて社を堅つ云々とある。この阿麻乃禰加都比女アマノミカツヒメは、阿遲鉏高日子根神の後である。縵を投げる話は山城賀茂の別雷の社の祭に縵をつけることが必要であつたことと思ひ合すべきである。雷神に關する傳承が、出雲の信仰を奉ずる族の間に代々傳承され、人と所とを異にしてなほ繰り返されしことが推定される。

かやうに出雲系の神々は、水や雷や蛇に關聯する所多いのである。これは出雲に中心を置いて發達した地方的宗教の特色を示すものではあるまいか。

また大國主命の神話を考察すると、此神は、巫術と醫藥に關係してをる。紀の一書によると彼は、少彥名命と力を戮せ、蒼生及び畜産を救ふために病を療する方を定め、また鳥獸昆虫の災異を攘ふためその禁厭の法を定め、百姓今に至るまで咸く恩賴を蒙れりとある。大國主の神話の中にも、命が皮の剝がれた兔に、眞水で洗ひ、蒲黃をとつて敷散し、その上をまろびて本の膚となすことを教へてをる。また猪に似た焼石を抱いて焼死んだときにもその母神は、神産巢日之命に請ひ、後者は蜚貝比賣と蛤貝比賣を遣はし、貝を焼き、水に母の乳汁をまぜて身に塗り、之を再生せしめてをる。後に大樹にはさまれて

拷殺うらちころされた時には、母神之を蘇生せしめてをる。

伊豫國風土記逸文に、大穴持命がすくなひこなの命を活かさんとして、大分の速見の湯を下樋より持ち度り來て、すくなひこなの命に浴むせしかばしばしがほどに活き起ちまして、眞寔し寝ねつるかもと詠めことしといふ記事がある。

此再生の型テームは、後に蒼生を醫術と禁厭で救ふ神にふさはしい話である。

黄泉の國に下つた時、スサノヲノ命は之を蛇室と吳公と蜂の室にいれしむる。その度に彼は妻スセリ姫の授けた蛇比禮、吳公、蜂之比禮をもつて危難を免かれる。此話も後に鳥獸昆虫の灾異を攘はんたみにその禁厭の法を定めたといふ神の挿話としてふさはしいものである。蛇比禮とか吳公蜂之比禮とかいふものは、實際巫術師の使用した一種の呪物であつたのであらう。

大國主命は、黄泉の國においてスサノヲノ命の娘スセリ姫と婚する。そして生大刀、生弓矢、天詔琴をもつて地上に歸つてくる。琴は、巫に必要な樂器であり、之によつて神靈を降下せしむるものである。また生大刀生弓矢といふ名に見ゆる生といふ形容語も死者を蘇生させるといふ意味を持つてゐるのではなからうか。大國主は、黄泉の國の支配者の娘と婚し死の將來者である黄泉の神を和なごめる靈力を授かり呪術者の資格を得て歸つて來たのであらう。

大國主は一名大物主と呼ばれてをる。モノといふのは、物質をさして云ふ外に精靈、神、魔を意味す

る語である。モノシリは、古代日本及び琉球で巫をさす古語であり、モノマサは、尸者を指す語であり、モノツキは、動物的精靈ののりうつれる者をさす語である。大物主といふ名それ自身靈界の支配者にふさはしい語である。

大國主命の扶助者であり、彼と同體とみられる少名毘古那神は、海を渡つて他界より來りし神であり、後に常世國に渡つてしまふ。彼は小人の神であり、息長帶日賣命の酒歌の中に酒を獻り來せし神として歌はれてをる。古代に於て酒が神事に密接なものであり、これによつて狂ほふことが神に領せられるごとく思惟されてゐたのであらう。酒造りが神に仕へる者の重要な任務であつたことはいふまでもない。之を要するに大國主の神話は、曾て出雲に存した宗教的權力者で同者に政治上の權力を有した呪術者團體の間に發生した神話らしい。

記によると大物主神は、勢夜陀多良比賣と婚するため丹塗矢と化り、流を下つて比賣の富登を突き、比賣驚き、矢をもたらして床邊に置くと、忽ちうるはしき壯夫となり、之と婚し、富登多多良伊須須岐比賣を生んだといふ。此神の外の物語にも矢が重要な役割を勉めてをる。記によると、黄泉の國で大國主は、スサノヲの射た鏑矢を野に求め、黄泉より歸國する時は生弓矢と生大刀を齎し歸り、葦原中國を征服してをる。

一體丹塗矢とか鳴鏑といふものは、雷神の標しるしであつたらしい。山城風土記によれば、雷神が丹塗矢に變じて若き女と婚してをる。

「賀茂建角身命、丹波の國の神野の神、伊賀古夜日賣に娶ひて、生しませる子、名を玉依日子と申し、次を玉依日賣と申す。玉依日賣石河の瀬見の小川の邊に遊びせず時に、丹塗りの矢、川上より流れ下りき。乃ち取りて、床の邊に挿し置きしかば、遂に感かまけ孕みて、男の子を生み給ひき。人と成る時に至りて、外祖父建角身命、八尋屋を造り、八つの戸扉を堅め、八醜しほりの酒を醸みて、神集へ集へて、七日七夜樂うたげ遊びしたまひき。而して御子と語らひて、詔り給はく、汝が父と思はむ人に、この酒を飲ましめよと詔りたまひき。即ち酒杯を擧げて、天に向ひて祭りを爲して即ち屋の蓋を分け穿ちて天に昇り給ひき。乃ち外祖父の御名を因み取りて賀茂別雷命と申す。今所謂丹塗りの矢は、乙訓の郡の社に坐す火雷神にませり云々」とある。

矢のみならず雷神と關係せるは鋤である。阿遲志貴高日子根神の志貴は、紀にては耜といふ字であらはされてをる。その父大國主神は地を五百鋤をもつて經營してをるのである。その上その祖父八東水臣津野命は、鉏で、國の餘りを衝ささき、綱で引き寄せ、出雲の國をかためなしてをる。かやうにして鋤は、神が土地をたちさる道具であつた。古代日本人にとつては雷神は、地を裂く神である。神功皇后は、西征にあたり、神田を定めて神祇を祭らんとし、灘河の水を引き神田を潤さむとした。溝を掘つて迹こゝろ驚岡に及び、大磐が塞つて溝を穿つことが出来ぬ。皇后武内宿禰を召して、劔鏡を捧て神祇を禱らしめ、溝を通ずることを求む。ときに雷電霹靂して其磐を蹴裂て水を通ぜしむ、故に時人その溝を號なづて裂田溝さくたのうなでといふ（日本書紀卷九）とある。地を裂く道具である鋤が雷神に關係する一つの理由を了解することが出来る。

扶桑略記敏達天皇の十四年の條に次の如き傳説が見ゆる。尾張國阿育知郡に一農夫あり、夏日田を灌漑してをるこ、雷雨が來た。樹の下に雨を避け、未によりかかつて立つてをるこ(支_レ耒而立)俄かに雷が前に墜ちた。その狀小兒の如くである。耒を擧げて撃たうとするこ雷は、我を害するな、その報ひとして汝に異兒を生ませてやらう、その代り我爲に一楠舟を造り、その中に水を盛り、竹葉を泛べて自分に呉れこ頼む。雷の言の如くし、舟を之に與ふこ忽ち昇天する。數月にして妻妊娠し、期に及んで男子を生む。その兒の頭に靈蛇が三重に纏繞し、首尾相至り後に垂れてをる。年十有餘にして甚だ膂力あり、能く方八尺の石を擧げ、之を數丈の遠きに投げうつこが出来る。……後元服し優婆塞となり猶元興寺に住する。其寺で田を作り水を引くに際し諸王等が妨げて水を入れず、そのため田がかれてしまふ。時に優婆塞大いなる鋤柄を作り、水門口に立てて居る。諸王等鋤柄を引棄ててしまひ、水門口を塞げて寺田に水を入れぬ。するこ優婆塞亦五百人引の石を取り、水門を塞ぎ、水を寺田に入れる。王等優婆塞の力を恐れ、終に犯さず、以來寺田は渴せず、豊りを得るやうになつた。後得度して道場と號する云々。

日本靈異記第一に小子部栖輕の異傳をのせ、雄略帝に命せられて雷を捉へに行くとき「ナゲ緋纒ニ著レ額ニ擊ニ赤幡ヲ乘テ馬ニ」走るとある。賀茂縁起に御祖神たちが昇天した別雷神を戀慕ひあると夜夢に御子が吾に逢はんがためには天羽衣天羽裳を造つて火を炬き鉾を擎げて(中略)吾を待てよと教へたとある。こういふ文献から鋤と矛とは、雷神を牽引する力を持つてをるといふことを推論することが出来る。かやうにして何故に雷神である大國主神が、八千矛の神といふ名で呼ばれ、また日神の子孫にその國を讓るを承諾した際武甕槌、經津主の二神に「平_レ國時所杖之廣矛」を授けたかを了解することが出来る。

矢、鋤、槍の外に、劔も雷神に密接な關係がある。雷神武甕槌神は、劔の神天尾羽張神の子であるし、彼が天鳥船神と出雲國伊那佐の小濱に降りつくると十掬劔を抜き、浪穗に逆まに刺立て、その劔の前に跌

坐して、大國主神に、葦原中國を日神の子孫に奉るや否やを問ふてをる(記四七―四八頁)。

後に神武天皇の軍が熊野に到つた時、惡氣にあたり、皇軍ごとごとく氣を失つた。その時天照大神と高木神は、建御雷神に地に降つて御子達を助けんことを命ずる。すると建御雷神は、おのれ下らずともかの國を平げし横刀を降すべしといひ、高倉下タカクラジの倉の頂を穿つて之を墮し入れる。劔は庫の底板に倒まに立つ。高倉下之をとつて天皇に奉り、之によつて天皇初め皇軍悉く意識を恢復する。この劔は佐士布都、甕布都、布都御魂などと呼ばれてをる(記六五、紀八十、八十一頁)。一方において建御雷神は、また記によると建布都神、或ひは豊布都神と呼ばれてをる。建及び豊は美稱であり、本名は布都である(一五頁)。また紀の一異傳に従ふと彼は經津主神と共に地上に遣されてをる(五二頁)。かういふ名稱に共通に存在するフツといふ語は、物を切斷する狀の擬聲詞であらう。かやうに建御雷神は、常に劔と聯想されてをる。

雷神なる阿遲志貴高日子根神も亦、十掬劔を抜いて天若日子の喪屋を切伏せ、足をもつて蹴離つてをる。神話はこの大刀の名を大量亦は神度劔と傳へてをる。

更に須佐之男命が大蛇の尾の中に天叢雲劔を發見した挿話を想起すれば、雷神と劔とが相關聯せることを否みえないであらう。劔でたちさる行爲と、その散る火花とが、疑ひもなく雷電の聯想を喚起したのであらう。きつさきのとがつた矢とか鋤とか矛とか劔のやうな器具が、曾つて雷神の標章であつたといふ想像は確からしい。

須佐之男命は、天叢雲劍をその子孫天之耆根神をして天照大御神に奉らしめてをる(紀三八頁)。これが後に皇室の神器の一つとなつてをる。

前述せる如く大國主神は、その廣矛を建御雷と經津主神とに献じ、天孫をして、その矛により葦原中國を平げ得しめんとしてをる。こゝに挿話は、疑ひもなく敗れたる豪族が、勝てる豪族に神器即ち祖神の標章をゆづりわたしたことを偲ばせてをる。神話の編纂者が、こゝに挿話を附加して、神の標章のことなる二つの政治的宗教的團體の融合をたやすくしたといふことが考へられる。

事實日本紀によると崇神天皇は、出雲の宮の神寶(武日照命(一名武夷鳥、又天夷鳥)天より將來せるもの)を見んと欲し、「矢田部造遠祖武諸隅を遣して獻つらしむ。このときにあたり出雲臣之遠祖出雲振根神寶をつかさざれり。こゝに筑紫にいつてまゐるあはず。その弟飯入根則ち皇命を被り、神寶を弟甘美韓日狹カラヒサと鷓鴣ウガツクヌ滄に付してたてまつりあぐ。」出雲振根筑紫より還り、之を聞いて大いに忿り、弟を計をもつてあざむき殺す。そこで帝吉備津彦と武滄河別とを遣してもつて出雲振根を誅せしむとある(紀一一五—一一六頁)。

ついで垂仁天皇の二十六年、天皇后部十千根大連に勅して「屢使者を出雲國に遣して其國の神寶を檢校かんがへしむと雖も、分明に申す者なし、汝親ら出雲にまかりて宜く檢校定むべし」といはれ、十千根大連神寶を校定して分明に之を奏言し、仍つて神寶を掌らしむ(紀、一二六頁)とある。

こういふ半歴史的事實は、如何に征服者が征服せる豪族の神寶を所有せんと欲つするかを、いかにかゝる豪族が、その権力の淵源たる神寶の喪失暴露を恐れるかを明瞭に語つてをる。

上述の研究を通じて、出雲の古代の神々の性質が窺はれ、こういふ神々をまつてゐた此地方の政治的宗教團體に於て水と雷の崇拜が大勢力を持つてをつたことがわかる。彼等の間は太陽の崇拜は、主位を占めてゐないやうである。庭高津日、夏高津日、下照姫といふやうな名を見出だすけれどもこういふ神々は、第一列にはあらはれてこない。

後世出雲國造が新任するとき、その式は宮廷に於て行はれ、之に負幸物として金裝横刀一口、絲甘絢、絹十匹、調布廿端、鍔廿口を賜ふてをる。ついで國造は、國に歸り、一年潔齊して出雲の神を祭り、その後上京して神賀詞を奏上する。その際玉六十八枚、金銀裝横刀一口、鏡一面、倭文二端、白眼鶺鴒馬、白鶺二翼、御贄五十昇を豫め献上する。そしてまた一年たつて入朝奏聞する(延喜式、臨時祭式)。

此儀禮が古代に於ける兩勢力の關係を語る興味ある遺習である。國造の叙任を機として財物の授受が行はれる。かつ國造よりは品物の献上のみならず神賀詞の奏聞といふ行爲が之に伴ふのである。此儀式の目的が服従の誓を新たにするだけならばなにも朝廷から出雲の國造に對し、負幸を賜ふる必要があるまい。出雲の國造は、負幸物を賜はり、國に歸り、その神々をいはひ、その返事かへりごととして神賀詞の奏聞に

來る。そして神のゐやじり臣のゐやじりとして天皇の御代をことほぐ、神寶を獻る。その神寶の中に白鶴の存することを注意しなければならぬ。まごといはぬホムチワケの命が鶴を見て初めて口きいたといひまた天湯河板舉か此鳥を追ふて出雲で捕へたといふ傳説にあるごとく、此鳥は出雲の信仰に縁故のある靈鳥である。これを出雲より朝廷に奉るのは單なる「生御調の玩物」といふ以上に深い意味のあることを想像しなければならぬ。折口先生のいはれるやうに魂の獻上といふ様な意味が含まれてゐるのではなからうか(古代研究・民俗篇・二、八五七)。

出雲と大和との交渉は、單に征服・被征服の近代國家的關係以上に複雑な縁えにしにより結ばれてゐたらしい。恐らくは出雲族の宗教的に大和朝廷に奉仕することが或時代に於て必要であつたのである。

出雲の國造の奏する壽詞は、「須須伎振る遠止美の水の彌乎知に御袁知坐し」なごとある様に禊の聯想を伴ふてをる。國造自身大和に參向する時三澤で御禊をなして來る。出雲風土記は、其禊が阿遲須枳高日子命の故事に淵源すると云つてをる。即ち此命御須髮八握生ふるまで晝夜哭いて物を言はれなかつたのを大神夢にねぎまつると御子ことかよふと夢みたまふ。寤めて御子に問へば、御澤と答へ、御祖の前を立去り、石川をわたり坂上に至りところまゝ是處と申した。そこでその澤の水で御身を沐浴そくぎましきといふのである。折口先生の「水の女」によれば「爾時水沼出而、御身沐浴坐」のみぬまは水の女神を意味し之が禊の手傳ひをしたのであると云ふ。(古代研究民俗篇一)。下照姫が味耜高彥根神を詠じたといふ歌の一つ

天遠る夷女え渡らずせと、石川は片淵片淵に、綱張り亘し女よしによし寄り來ね、石川片淵の中に出る「石川」は、阿遲須枳高日子根命の渡つた「石川」と關係のありそうな氣がする。一體此歌は、下照姫が衆人に見なる此神の名を知らせんとした歌の一部と云はれるがそれではその時その所にそぐはぬ感がある。此歌のみならず紀や記に見ゆる歌はことなつた時と場所において成立した歌を、其儘物語の中に繰り入れたものらしい。たとへば肥前風土記杵島郡に見ゆる杵島岳の歌垣の時衆人が歌つたといふ「霰降る杵島が岳をさかしみと草とりかねて妹が手を取る」といふ歌が、やゝ形をかへて記の仁徳天皇の條に速總別王の歌として「梯立の倉梯山を嶮しみと、岩搔さかねて吾手とらすも」となつてをることを注意すべきである。豊玉姫の條に見ゆる尊の歌つたとされる「沖つ鳥鴨ごく島に我るねし妹は忌れじ世のことごとにも場所にそぐはぬ感じがする。要するにこゝにいふ歌は、男女相戀の歌として別の場合に行はれたものがやゝ形を變へて後の神話の中にとりいれられたのではなからうか。下照姫の歌なども本來は水邊の行事に際し男女相向ひ、歌垣のやうな眞似をした折の歌ではあるまいか。伊勢風土記逸文に五十鈴といふ名儀を説き、この日八小男、八小女等、こゝに遡り逢ひて泗樹接びき。因れ以て名と爲せりとある。また常陸風土記香島郡の條に見ゆる歌垣は水邊の松原であつたことは明白である。賀茂の祭に八小男八小女の勤仕が必要であり、社傳に處女の水邊における受胎を語るのは、矢張り水邊における神秘的行事と關係があるのであらう。更に遡つて天照大御神と須佐之男命の天安河を隔て玉と劍を交換し、

互ひに子を生まれたとはいふ神話もやはりこういふ習俗に本源があるやうである。要するに古代の神々殊に雷神である阿遲須枳高日子命の様な神には、水のほとりで男女が歌垣的行事をなした神秘的の行事を必要としたらしい。

此命は禊によつて眞言を言ふ様になつたが此命の傳説と似てをる本牟智和氣の御子の物語に於ては、御子は白鳥の獲得によつて眞言云ふ能力にめぐまれる。また記によれば出雲に到り、大神を拜し、還り上り、肥河の中黒櫛橋を作り、假宮の中にます時、出雲の國造の祖名は岐比佐都美といふ者青葉山を飭り、其河下に立て大御食を獻らんとする。其時御子が初めて物言ひ給ふとなつてゐる。岐比佐都美といふ名は水戸神が河海に持別けて生み給ひし神々の中に見ゆる天之久比奢母智神、國之久比奢母智神と相通じ、水の神であるらしく、宣長は後者の名を汲匏持といふ意味で説明してをる(傳五)。しかして匏神が水神であることは鎮火祭の祝詞が之を證明してをる。火の神なるホムチワケは水の神なる出雲の社に詣り、水の神らしい岐比佐都美の饗應をうけ本心を得るのである。そして傳説はすぐ命と肥の川の名をなせる蛇身の女との結婚を説いてをる。雷神なる阿遲須枳高日子の命にとりみぬまの禊が緊要であつたやうに此大和の火の徳ある皇子にも水の神の助力奉仕が必要だつたらしい。火と水、此二つの靈力が古代人にとり殊に畏るべき尊むべき對象であり、當時の支配者は、火と水とに對する支配力を持つことを必要とした様である。大和の日の子孫が、火に對する特殊の靈力を持つてゐたことは例のコノハナサクヤ昆

賣の火の中に三皇子を生み給ふ火の試しの物語によつて證據だてられる。そうして生れた火遠理命が、海中の國に行き、豊玉毘賣と結婚することによつて水に對する靈力を保證されて歸る。火と水とに對する試練、之を経ることによつて古代主權者の神聖な性質が證明されたらしい。

こう考へてくると出雲の族が、水の神より得たる呪力を日の神の子孫たる大和の君に授け傳ふる必要が如何に重要であつたかが推察される。大和と出雲との關係は、後世の單なる征服國家、被征服國家の關係によつて見るべきでない。出雲の團體はその特色により大和朝廷の足らざる方面を補ふ補充的機能を満してゐたのではなからうか。單に品物、行爲の給付のみならず、出雲族からの女が或時期に歴代后妃に備はつたらしい形迹のあることを注意しなければならぬ。紀によると神武帝は、事代主の神三島溝楸耳神ミヅクヒミの女王櫛媛ヒメタガハラに婚して生める兒媛ヒメタガハラ踏躡イヌズ五十鈴媛命を正妃となされてをる。記によれば帝は、美和の大物主神丹塗矢ニツクヒに化して三島湊ミヅクヒの女勢夜陀多良比賣セツヤタタラヒに婚し、生みたる子比賣多多良伊須氣余理比賣ヒメタガハラを妃とされてをる。二代目綏靖帝の妃は、事代主神の少女オトムスメ五十鈴依媛イヌズであり、安寧帝を生まれてをる。此帝は、事代主神の孫鴨王カモノオホキミの女淳名底仲媛と結婚せられてをる。かくで三代續いて大國主神の子孫と縁結びをされてをるのである。

一方に於て大國主神は、邇邇藝命の外祖父高皇產靈尊の女三穗津姬を妻となしたことになる(紀五十三)。こういふ所傳は、一面からいふと出雲大和の二勢力融合のための大和朝廷側の苦心の結果編

み出されたとも解釋せられるが、一面からいふと實際兩者の間に單なる品物の授受のみならず、女のやりとりの行はれた時代の痕跡を語るものではなからうか。出雲族から冊立された后妃は、同時に巫女として日嗣ぎの君に奉仕する職分を持つてゐたのであらう。「水の女」としての後妃の性質については折口先生の最近の諸研究が精密明快に論せられてをる。

要するに出雲の大神を齊く祭祀團體に於ては雷神、水神の崇拜が主であり、太陽信仰を主とした大和の祭祀團體に對して補充的の機能を有してをつたらしい。もとよりこの區別は嚴密でない。太陽信仰も雷火の崇拜もつきつむれば火の崇拜であり、兩者は幾つにも相互交流してをる。またこの二大祭祀團體は、それ自身無數の小勢力の融合からなりたつたので、これらの小團體のそれ〴〵の神話神々の標章は、支配部族の信仰、神話や標章の中に織り疊まれて行つたに相違ない。したがつて一方の中に相矛盾する信仰も存し得る。然し大體二つのことなつた信仰上の中心點が存し、一方が他方を包容吸収して大體の日本の宗教的統一が出来上つたらしい。

遠い國外の異民族の宗教や制度を研究し、日本の古代もそうであつたらうと想像することは頗る危険な方法である。然し自分は、既に他の一論文によつて日本の古代に南方オーストロアジアの影響が言語の上に著しいことを論證してをる。古代日本の國家性質を知る上にオーストロアジアの言語を語る一民

族の有する制度が多少參考になるだらうといふことを次に語らしてもらひたい。

印度支那の山地民「*hill*」族は、チャム語に近い言語を使用し、大陸系オーストロアジア語使用民族中でも殊にマレイ系に近接してをる。彼等の中に東の君、西の君と呼ばれる二人の巫祝的王が君臨してをる。近隣の民族は、これを火の王、水の王と呼んでをる。何れも三・四村を支配してをるに過ぎぬ。火の王は *Séo* (白蟻兵) と呼ばれる家族に屬し、天神 *Yang Dai* が夢に示現してその盟約者たることを宣したと考へられてをる。王は、その村以外他村には入村に際し、きよめの犠牲を獻ずるに非ざれば立入り難い。それ故彼は村の門外に村の酋長、貴人が、式の費用を拂ふと定めるまで待つてをる。王の普通の任務は、大旱に際し、雨を祈り、または疫病の終了を祈るにある。その靈力は、神 *Yang Dai* が、しばく天降り、全ての重要な秘密を啓示するのに淵由してをる。(Henri Maspero, *Mœurs et coutumes des populations sauvages*, «G. Maspero, Un Empire colonial français, L'Indochine, 1929, p. 254-255»)

此火の王の所有する神劍に就て種々な傳説が傳はつてをる。隣族バナル族の間に行はれてをる所傳は次の如くである。

昔ジャライ族の間に *xep* と呼ばれる非常な富の持主が居り、數ある室の中に小大二個の鐵塊を所有してゐた。その中小い鐵塊は持主の魂に他ならなかつた。或時その息子が來て劍を鑄るため鐵塊の一つを呉れろと請求する。父は、仕方なく「大い方を取れ」と返事する。しかし若者は、その注意を忘れ、小さい方が

手頃であつたので、之を持ち行き、炭火の上へのせ、かくて「父の魂」を鑄てしまふ。鐵塊は、烈々たる熱を放ち、かなしきの石は、蠟の如く融解し、水は荒造りの刃に觸れると火となつてしまふ。その刀のそばにをり刀のために籐の鞘を作つてゐた *Pango* といふ一奴隷が、小刀でその指に傷つける。流れた血を刃の上にそぐと、鐵は忽ち閃々たる火光を發つする。奴隷は我を忘れ、刀が自分を食まんとしてをると絶叫する。みる／＼この評判がひろがり、重立つた人達が參集し、最後の宴がひらかれ、奴隷は、すゝめられた鶏の腿と心臓と肝臓とを食する。ついで刀に飛びつき、その白熱した刀を噛む。忽ち火玉がその身體を包み、*Pango* は、鐵の中に入り *Kep* と合體してしまふ。たゞちに鐵は冷却し、それ以來神靈が此劍の中にやぶる。誰も此劍に觸れやうとしないので劍は赤色木綿で包まれた竹籠の中に置かれ、奴隷の編んでゐた籐も *Kep* に屬した鍋の蓋も、鹽と唐辛子を入れた竹の筒も同様に大切に保存されることになつた。曾つて誰もこの神劍を鞘より抜いたことがない。抜けば此世の終りと信せられてをる。一九〇四年佛の探險家オダンドル P. Odend'hal が是非これを見せろと要求し、ついに王及びその徒黨に暗殺されてしまつた有名な事件がある。

神劍についての今一種の傳説は、ジャライ族の間に傳はるもの、それによると *Po-The* (佛陀の訛り) の武勇談になつてをる。メーコンの河に沿ふて彼が下つてくると、全ての地上の王が集まつて、天から落ち、河底に輝く神劍をどらんと争つてをる。チャム人が成功して之を獲得したのを *Po-The* 奪ひ、ジャ

ライの國にもたらし、カムボディア人は鞘だけ得て、自國にもち歸る。チャム人いかつてジャライを攻むるのを彼、神劍の靈力で之を撃退する。即ち神劍に黑白の水牛の犠牲を獻じ、之を敵方に向けると、刀は大火大水を出だし、全てのチャム人は、焼かれ、溺れてしまふ。彼の護符タリスマンの一つなる籐の棒が天地を暗黒ならしめ、チャム人はその路を發見出來なくなり、一人も逃れることが出來ぬ。やがて Po-The は、姿を消し、その劍は火の王に託され、彼の忠言に従ひ、鞘の持主カムボディア人とは同盟者たることになつた。兩國民に刀と鞘をわけ持たしたのもカムボディア人に刀より價值の劣る鞘を與へたのも天の意志であり、その故に兩國の王の間に行はれる獻物の交換に際し、カムボディア側がより多くの獻物を出さなければならぬのだといふ。

この火の王と水の王に向ひ、三年毎にカムボディア王から莫大な進物を贈遣する使を派遣したのである。この習俗は、極めて久しい古代からのしきたりで、一六〇一年附のカムボディア憲章の中にも其旨明記せられてをる。國王からおくる國書の中には火の王水の王が山地にすむ全ての夷人の支配者として永久に榮え、道と森とを外敵よりまもり、まゐるものの中善しき者、惡しき者とを區別し、森々の精、村々の精が王に末永く長壽と豊饒と權力とを保障し、やすらげく、ささげく治めんことをほいでをる。カムボディア王の贈物は、二匹の雄象、六十匹の水牛を初め、數多の衣裝調度類、樂器、バラソル、鐵、鉛、鹽、金具、織物等からなつてをる。それに對し、火の王、水の王は、象牙のごく少しと犀の角

一つと各自その右の拇指の指痕ある蜂蠟のパン一個を贈進するのみである。このパンは容積大で、これにのこす米と胡麻とを一杯入れた二個の大瓠を添付する。

此贈物は、カムボディア側の豪奢な贈物に比べてとるに足らぬものであるが、カムボディア人に對しては、特殊な重要さを持つてをるのである。即ち火の王水の王から淵源し、この森の巫祝の超自然的力の一部を包含すると考へられてをり、彼等にとつて並ならぬ大切な品なのである。

この品物が、首都に到達するや、たゞちに王の神聖な劍の守護者たる婆羅門に引き渡される。婆羅門之を丁寧に君主の象徴たる品々の側にかき集め置く、この蠟によつて、儀式の時いろくくの祭壇に燃やす蠟燭を作る。また疫病の流行する時、大洪水が起つた時、戦争の時に、彼等は地上に少量の米と胡麻を蒔き、悪靈の怒りを慰めんとする。また、大旱をのぞくため、雨をよぶため、王は、王國の守護神に祈り、その時火の王水の王のおくつた、象牙の小部分、犀の角、衣服を出し、之にさよめの水をそゞぎ、四人の Mahajaya がその下にうづくまつて蛙のなき聲に真似るのである。その榮枯盛衰にかゝはらず、カムボディア王室はこの使節派遣を一八六〇年までつゞけた。

劍にまつはる今一つの傳説は muong 族の間に行はれるものであり、Yang とム主人公が龍に捧げられた支那の王様の王女の一人を Yeak (鬼の一種) から得た神劍の力で救ひ、ついにその婿がねになる。その後主人公支那より逃げ、武器の鞘は、カムボディアに、柄はシナムにのこし、刃身はジャライの國に

もたらされるといふ筋である。

平地の住民のみならず森林内の住民にとりこの神聖な品の保管者は、極めて畏怖されてをる。彼は火と水を動かす力ありと考へられてをり、彼がその刀で右に空中を切れば、火と水が全人類を破壊してしまふ。左に切れば全ては闇の中におちいてしまふ。流れや河を刀で切ると水の流れが止まつてしまふ。一握みの胡麻を空になげるといづれも刀に化して敵を殺してしまふと信じられてをる。

王が死ぬと、幕僚達が集り、戸外において集會を催し、あまた度、ことあげし、酒をそゞぎ、ついで、適當な人間を選ぶ。死人の息子は王位を繼承することが出来ぬ。なんとならば、王は、外家より妻を迎へ、母系制の社會なのでその子は母族に屬するからである。王の職權は、たゞ Seo の家族にのみ歸屬してをる。それゆえ死王の弟か甥の中に後繼者を求めねばならぬ。繼嗣が定まると Kekaur の家族の頭目が手頸に木綿絲の腕環をつける。前王の宮臣の位階はその儘にして新王は、その巡行し全管轄地から徵税をとる時隨行し援助をする官吏を選ぶ。選出の年に第一回の巡行をなし、二年後に今一回なし、ついで二年経過してから第三回の巡行をなし、第四回目は五年後に行はれ、爾來王は、氣隨に旅行をゆるされる。

その巡行の間、訪問をうけた各村の住民は一頭の水牛と一匹の豚を殺し、祭の費用となし、王には土産として銅の大きな鍋、一頭の牛、生豚一匹を捧げねばならぬ。各家の戸主は、鐵の小つるはしか蠟の

小片か、硝子品の類か、とにかく二十サンチーム位ひの價ひの物をもたらさねばならぬ。王自ら巡行しない場合はその官吏を派遣する。するとその費用は半分位ひに減少する。

王の幕僚は、最高の侍臣たる王の酒をくむ際醸された穀粒の入つてをる壺に水をそぐ掌酒子しやくじ、米を炊ぐもの、次に象を牽き荷鞍を載せる御者二人、最後に腕環の糸を切る小刀をつくる鑄物師、王の小負籠をつくる箒ざる作り、次に新選出王の腕頸に木綿の腕環を結ぶものからなつてをる。この高官達に交つて四人の女子がをる。第一の女は、腕環のため木綿をつむぎ、第二は、登極の際王の結ぶ白い下帯を織り、第三は衣をつくり、第四は煙草をいれる小袋を縫ふ。

王が、病氣になり、危篤に陥ると、家族が集合して、その絶息する前に、槍で腹をついて殺してしまふ。その遺骸は、ジャライ一般の習俗と異なつて火葬である。

水の王は Recham の家族に屬してをり、その保持する神器は、火の王に大體酷似してをるが、前王の死に際し、地中に埋められ、今は若干の小石を有するのみだといふ。その神劍は、より小であり、王の勢力は、前者より遙かに劣つてをる。一説によると王の神器は觸れた者を殺す寶玉の飾つた木の笏であるといひ、殺した笏の反對の端でその犠牲者に觸れると生き返らしめ得るといふ。他の一傳に従ふと彼は Mak-Yang と云ひ世界の終りが來ると初めて熟する木の實にかたごる石を所有してをるといふ。Cupet 大尉の採集した報告によると、寶石を飾つた棒といふのは、永久にしぼまぬ花を持つ籐に外なら

ず、石といふのは攸久の昔より緑の色を變へぬ葛の實だといふ。是等の神寶は、また世界的大洪水を惹起し得ると云はれてをる。土人の云ふに、或時水の王が、その隣人を悦ばず、その寶の靈能を利用した。すると鼓の中に乗つて逃れた巫祝の王を除き、全人類が死滅してしまつた。たつた一人生きのこり、大いに寂寥を感じた王は、その後嗣にゆめ／＼同様なことを繰り返すなど忠告したと云ふ。(Henri Maitre, *Les jungles Moï*, 1912, p. 436-439, 450-453, Guarlach, *Quelques notes sur les Sadet*, *Revue indo-chinoise*, 1905, p. 185-188, Trinquet, *Notes sur la tribu des Djirai*, *Revue indo-chinoise*, 1906, p. 1903-1921)

未開社會に於ける主權者の性質が各國に於て大體似かよつてをることについてはフレーザーなどの研究がある(Frazer, *Golden Bough*)。ジャライの火の王、水の王が必ずしもオーストロアジア系民族の特色でないことは云ふまでもない。しかしこの制度が、東亞古代の君主制が如何なるものなりしかを考察する上に重大な資料となることは多言を要しないであらう。森林中の巫祝王が、如何に平原の佛教的文明國たりしカムボディアの君主にとつても尊敬されしか、その間に行はれる物品の授受は、後世の貿易といふ名によつていひ表すにはあまりに宗教的なりしこと、こういふ森林の王の助力提携が、平原の文明國家の主權者にとつてもどれほど必要であつたかが窺はれる。また森林中の土人部落から王に捧ぐる貢物も宗教的の獻物である。こういふ政體の衰亡が、自族及び隣族の宗教心の衰滅と密接な關係を持つて

をることが推測される。

ジャライの巫祝王の宮廷を構成する官員の一部が、その登極の式に於てそれ／＼ある職務を分擔せるものであることは日本の古代宮廷を偲ばして興味ある。ことにその登極の際、王の印したる木綿糸の環飾りを王の腕につける者が他族の頭目である。そしてその腕環や王の下帯を作る女官までが設けられてをる。精密な調査がなされるまで大膽な推論を下すことは慎まねばならぬが、異族結婚の行はれる此社會に於て他族が登極の式に援助をなすことには注意を要する。その腕環をつくる女も同じ他族の出であつたのではなからうか。たゞ王妃の冊立が如何なる形式によつたか今の所自分の手もとにそれを知る材料がないのは遺憾である。火の王と水の王の外に風の王も存するといふ訛傳があつたがトランケの説によるとこれは火王の派遣者であり、朋友であり、年齢上尊敬して土人に王と呼ばれたものであるといふ。とにかく是等の王や大官が自然力を各自支配すると信ぜられ、その協力同盟によつて社會が成立してをることは、東方古代國家の成立を研究せんとするものの留意すべき現象である。

松 本 信 廣